

## 韓国におけるミロク信仰変容の連続性 — 下体埋没仏の現場を探る —

金 泰順※

### はじめに

宗教と民俗という関係の問題は簡単明瞭には答えられない問題である。

昨今の学者たちがAかB、もしくはCとして理論付けても、これだという明確な答えが出ないまま多くの理論が続出する現状である。結局、宗教と民俗は厳密に分けられないのである。それは民俗というカテゴリーの中にはすでに宗教的な要素が含まれているからである。例えば、アルタミラの洞窟の壁画や高句麗の古墳壁画にも既に宗教行為が含まれていたのである。ただ体系的に整理されていない未分化状態なのである。それらの壁画に現れている内容は原始民俗と言えるが、原始宗教とは言えない。原始宗教行為が含まれている原始民俗と言った方が正解かも知れない。つまり宗教と民俗は必要充分の条件関係であり、民俗のなかには宗教行為が含まれている。このような宗教行為は民俗信仰とも言える。民俗信仰は民俗宗教として発展することとなる。韓国の場合、民俗信仰は原始自然信仰と祖先信仰が主になる。原始自然信仰には巨大な木、石などの自然物そのものから自然現象まで含まれている。祖先信仰は一緒に暮らしていた家族や祖先がその対象になっていた。さらには巨大な木、石などの自然物に祖先の霊が憑いていると信じて祀る場合もある。このような韓国の民俗信仰は仏教が流入したことにより大きく変化することとなる。最初の段階では外来宗教の仏教は数多くの摩擦を招いた。韓国に土着化していた固有の民俗は仏教の必要性を全然感じていなかったからである。仏教の流入はあくまでも政治的な面からで固有の民俗信仰は仏教信仰を受け入れようとは思わなかったのだ。したがって仏教伝来の最初の段階では殉教者などの犠牲が伴った。しかし、ある時期の賢明な政治家により仏教と民俗は手を繋ぐこととなり、その間にはどちらにも偏らなかった中間段階の現状が現れたのである。

それが「ミロク」である。仏教の弥勒仏が民俗の石信仰と結びつき「ミロク」様になる現象である。これは短時間に出現した状況ではなく、歴史の中で徐々に起こったことである。このような状況は「民俗の変容性」という仮説の証明にもなる。民俗は変わるものであり、筆者はこれを「変容」といいたい。さらにその変容は歴史上連続性を持っているので「変容の連続性」と定義して、本論考では韓国のミロク信仰の変容の連続性について考察してみたい。

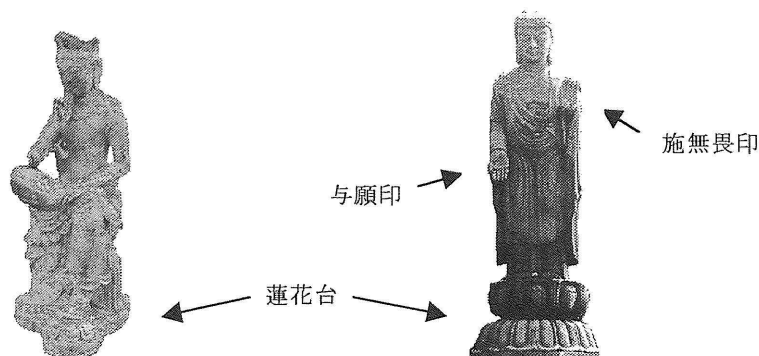
---

※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

## 1. 「弥勒」と「ミロク」

一般的に韓国で知られている代表的な弥勒仏像の形態は二つである。一つは蓮花台の上に半跏趺坐で坐り、軽く下げた顔を右手で支え、なにかを熱中して考えている姿の半跏思惟像である。もう一つは右手で与願印、左手で施無畏印をして蓮花台の上に立っている立像である。これは弥勒仏が未来仏としてこの世に来る途中であることを知らせているともいわれている

一般的に韓国で知られている代表的な弥勒仏像の形態は下の二種類である。



(図1) 弥勒半跏思惟像

(図2) 弥勒立像

しかし、上記のような仏像は寺院に存在しており、村には民間の仏として様々な形が存在している。筆者はそのような民間の仏を「民仏」と定めてみた。

民仏はほとんど弥勒仏である。民間の間で民仏は弥勒ニム（弥勒様）、弥勒ハラバチ（弥勒爺）弥勒ハルマニ（弥勒婆）など多様な名で呼ばれていた。初期の民仏は仏像としての特徴を簡単に具えている。例えば眉間の間の白毫、首の上の三道、着ている法衣のしわなどである。しかし、時間が経過することによりこのような簡単な特徴までも省略され、弥勒という呼び名だけが残された。外形から見ても弥勒仏とは見えない親しい人の顔をしていたり、男根石や石柱形の石もあった。しかしそれらはみな弥勒と呼ばれたのである。祈祷の対象になる石全てを弥勒と呼んだのである。それは弥勒が民間に親しまれる事は無論、信仰的なメリットがあったと思われる。その信仰的なメリットは大きく二つある。

①民衆は弥勒を仏として扱うと同時に神として扱った。

②乱世においては、民衆のメシアとして希望的な存在であった。

①に関しては前述したように韓国ではすでに原始自然信仰が存在しており巨石を祀る習慣があったからである。巨石は神霊の霊が漂っており、その神霊は弥勒の霊かもしくは祖先の霊が漂っていると思ったのである。つまり、仏と神と祖先が未分化状態だったのである。その未分化状態が「弥勒爺」「弥勒婆」のように呼ばせたのである。「弥勒爺」「弥勒婆」は「弥勒様」にもなり、「仏」という呼び名はいつのまにか消えた。厳密にいうと仏教の「弥勒」とは異なる「ミロク」になったのである。

②に関しては後述するが、仏教が伝来した当時の韓半島は三国時代であった。半島は三国に分かれており、国内の争いはもちろんのこと、半島という地理的条件から日本、中国との争いも絶えなかった。民衆から見ると時代は末世であった。国は戦争に莫大な経費を使うため民衆に重い課税と夫役を要求した。民衆の生活は辛かったので乱世を救うメシアを求めた。その時出現したのが「ミロク」であった。つまり、民衆により仏教の「弥勒」が「ミロク」に変えられたのである。

では、本来の「弥勒」について簡単に述べてみる。

## 2. 弥勒下生信仰

弥勒というのはサンスクリット語のMaitreya, ハリ語のMettēyaであり、中国では「慈氏」、「慈尊」として翻訳される。弥勒仏は釈迦が涅槃に入った後56億7千万年後にこの娑婆世界に出現する仏である。かつて釈迦と弥勒は共に菩薩修行をしたという。しかし、釈迦が菩薩時代に弥勒より早く修行を終了し成仏したという。したがって釈迦は今日、衆生を救済する仏になったが弥勒はまだ修行をしている。弥勒はまだ修行をしているため弥勒菩薩とも言われるが、釈迦の次の世代に衆生を済度（救済）する未来仏として決められているので仏とも呼ばれている。弥勒下生経には弥勒仏がこの世に出現するとこの世は理想的な国土に変わり土地は硝子のように平面で綺麗になり、花の香りで溢れていると言われる。また人間の寿命は8万4千歳になり、知恵と威徳を備え穏やかな喜びで満ちているとも言われる。弥勒がこの世に出現すると三会の説法をする事となる。この三会の説法に参加することにより人間は救われる。しかし、人生は短いので生存時に三会の説法に参加することは不可能である。したがって死後、兜率天に行って（兜率上生）弥勒菩薩のそばで56億余年経ってから弥勒が下生する際、共に地上に降り、三会の説法に参加するのを望むこととなる。これが、韓国で一般的に知られている弥勒上生信仰である。一方、このような兜率上生とは関係なく未来仏としての弥勒下生を待ち、救われる事を望むのが弥勒下生信仰である。

弥勒信仰の中心になる経典は弥勒六部経である。弥勒六部経は下のようである。

① 23 弥勒菩薩下生経 （大・14・421以下）法護 AD303?

② 26 弥勒来時経 （大・14・434以下）失訳

\*③ 28 弥勒成仏経 （大・14・428以下）後秦 鳩摩羅什（401）AD402?

\*④ 29 弥勒下生経 （大・14・423以下）後秦 鳩摩羅什（401）AD402?

\*⑤ 32 観弥勒菩薩上生兜率天経…上生経 （大・14・418以下）北凉 沮渠声 AD455?

⑥ 38 弥勒下生成仏経

以上は赤沼智善の『仏教経典史論』に書かれている松本文三郎の分類である<sup>1)</sup>。

※23～38の数字は『仏教経典史論』pp.1997～203.赤沼智善の分類による番号であり、「」は翻訳者である。（ ）は赤沼智善の分類による年代でありAD?は韓国の学者モク・ジョンベによる年代である。しかし、モク・ジョンベは「法護」を「竺法護」として表記している。年代が書

かれていない弥勒来時経はその内容が簡単であり、弥勒六部経の中で一番先に翻訳されたと推測されている<sup>2</sup>。弥勒經典のなかで代表的な經典は弥勒三部経である。弥勒三部経は上記の\*③、\*④、\*⑤である。

このように弥勒信仰は上生信仰と下生信仰に分けられる。韓半島では弥勒上生信仰は貴族の間で多く信仰されており、弥勒下生信仰は庶民のなかで活発に信仰されてきた。その理由は、貴族たちは現在の生活で満足するため、このままの幸せを兜率天に持って行く兜率上生を願ったのである。反面、庶民たちは現在の辛さから早く脱けだしたかったため弥勒下生を待つのである。弥勒下生こそ庶民の希望だったからである。

弥勒下生信仰は朝鮮時代の廃仏政策の時代にも民衆に信仰され、韓国の民衆の心の中に深く刻まれていた。特に政治的な混乱期には民衆の精神的な柱となった。また韓国の伝統思想にまで発展して旧韓末から発生した新興宗教にも大きな影響を与えた。現在、民族宗教と名乗っているいくつかの新興宗教にもこの弥勒下生思想が深く取り込まれている。

弥勒下生経には弥勒が下生する時期と末法時期とが連結されている。弥勒信仰は末法の危機と結合されているのである。しかし、末法時代という意識は釈迦の入滅後500年ごろから強く現れていた。

印度の歴史には大勢の仏陀がいる。釈迦以前にも過去仏としての仏陀がいて、釈迦入滅後にも未来仏として仏陀を待つのである。つまり、印度の歴史観によると過去に大勢の仏陀が出現したように未来にも大勢の仏陀が出現するのである。釈迦以前の過去仏は釈迦以後の未来仏にも連結するのである。過去に可能だった事は未来にも可能性を持つからである。このような思考から登場した未来仏思想は初期經典から大乘仏教まで引きつがれている。それが未来に衆生を救済してくれるという未来仏である。そのような事から見ると本当に弥勒が歴史的な実存人物か宗教的な虚構の人物かに関しては諸説紛々としている<sup>3</sup>。しかし、民衆に希望を与える未来仏信仰は韓国では幅広く広がっていたのである。半島という地理的な条件で外部からの侵略戦争とそれに伴う国内の内紛は小さな半島をいくつかの国に分け戦争が絶えなかった。その内、もっとも辛かったのは庶民であった。重い税金と夫役で苦しめられ、庶民たちはいち早く新しい世の中が来ることを望んでいた。この世は末世であり、この世を救済するメシアを待っていたのである。それに当てはまるのが弥勒下生信仰である。

韓国の弥勒下生信仰は政治のもとに発展した。韓半島内で国が変わる時期や統治者が変わる時期に弥勒下生信仰が盛んになった。それは乱世の民心を収拾しようとする政治家の野心でもあった。

韓半島の新羅、高句麗、百済の三国は次第に勢力が弱くなり、新進勢力が登場し傾ける国家を活かそうとした。その中でも活発に動いていたのが高句麗と百済である。高句麗は後高句麗、百済は後百済を建国しようとした。当時、後高句麗を建国しようとした弓裔は自ら弥勒と称し下層民たちを包摂し政治的基盤を構築した。



### 3. 三国の混乱期の統治者と弥勒

- 弓裔

新羅の王族である弓裔（グンイェ）は自ら弥勒と称し新羅の領土に弥勒浄土を建設するというスローガンで民衆反乱を起こした。これが仏教的なスローガンを掲げた最初の政治運動であった。新羅の王家に出生した弓裔は出生後直ぐに捨てられた。乳母のおかげでやっと命だけは助かったが、片目が不具になった。行く場もなく、捨てられた幼い王子は、乳母により育てられたが経済面と教育面を考えた乳母は王子を寺に入れ、寺の教育を受けさせた。このようなわけで弓裔は自ら僧侶になった。現在でも弓裔が成長した七長寺（チルジャンサ）の壁には弓裔の絵が描かれている。始めは竹州城の盗賊の群とともに基盤を築き901年に開国した。成長してから自分の不幸な出生の秘密を知ることとなった弓裔は新羅社会に恨みを持つこととなった。

彼は新羅の王族にもかかわらず、新羅の土地に高句麗の民を抱擁して後高句麗を開国した。弓裔は最初、首都を松嶽（ソンアク、現在の開城）に置いて国を摩震と称したが911年には首都を鉄原に移して泰封と改称した。

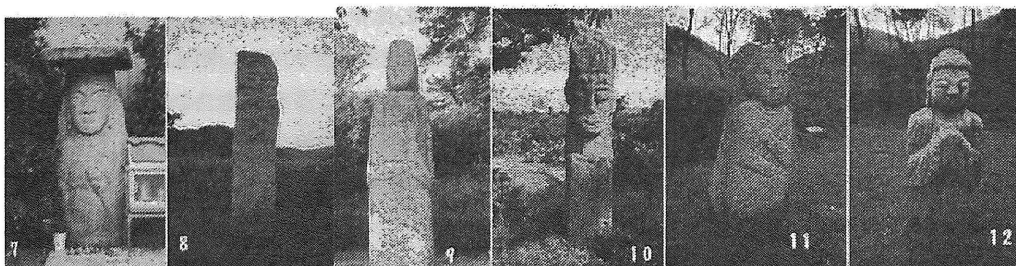
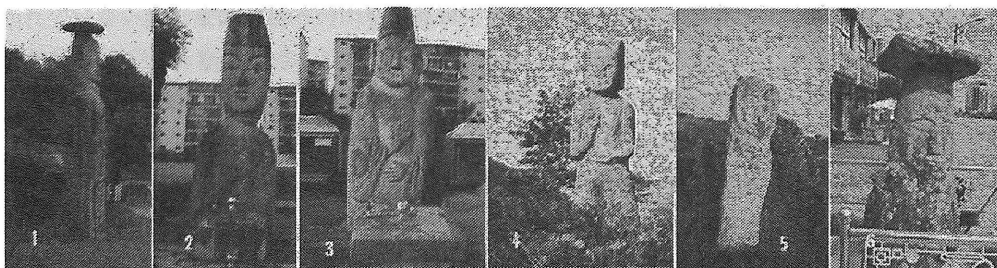
弓裔は法名を善宗とした。いつも体には袈裟を掛け頭に金冠を被り自らを弥勒仏と呼ばせ息子たちは青光菩薩、神光菩薩と呼ばせるようにした。外出する際は馬頭と尻尾を彩色錦で飾った白馬に乗り、少年と少女には旗、天蓋、香、花を持って前に行くようにした。後ろには200人余りの僧侶が梵唄を唱えながらついてくるようにした。言わば、弓裔は弥勒仏でもあり、弥勒浄土を治める転輪聖王でもあった。

### 4. 弥勒下生信仰の韓国的な解釈

- 下体埋没仏の現場

前述したように政治的な野心が籠っている弥勒信仰は政治家により新たに解釈された。それは弥勒下生の意味の解釈である。弥勒下生の意味が「天から降りる」の意味ではなく「地下から生える」と解釈して弥勒の胴体の一部を地下に埋めたのである。弥勒の胴体が地下から徐々に湧いてくると解釈し、地下から完全に湧いてくると韓半島には弥勒浄土が建設されると民衆に希望を与えたのである。民衆はすでに自分たちの神になっている「ミロク」のため祈り続けたのである。

次の写真は韓国の21ヶ所の現場から調査した下体埋没弥勒仏である。これらは寺院の弥勒とは異なる民仏であるため「ミロク」と表現する。「ミロク」はこの世に来る途中であるため立像の方が多い。



(写真1の異なる方向、部分図。三道・法衣のしわ・手印が見える。)

#### ① 写真1：基率里の石仏立像

写真1は安城市三竹面基率里の石像である。基率里は山の中である。昔、この場所には寺院があったといわれる。石像は大きい石柱で仏像と同じ形式で造成されている。ミロクといわれるこの石像は南北に二基立てられ双仏ともいわれる。向かって左側が女ミロク（方向が南であり、南側のミロクという）右側が男ミロク（方向が北であり、北側のミロクという）であり、村の人々は左側の女ミロクをミロクハルマニ（ミロク婆さん）と呼び、右側の男ミロクをミロクハラバチ（ミロク爺さん）と呼んでいる。この2基のミロクは比較的仏像の条件を備えている。まず、2基とも額は知恵を象徴する肉髻凸型になっている。また首には三道かあり法衣は両肩を隠す通肩である。手印は衆生の全ての不安を払拭し、彼らの願いを叶えてくれるという施無畏印と与願印の姿勢を取っているが手の形態は相応しくない。このような石仏立像は高麗時代の典型的な地方様式であり、安城地域ではこのような石仏が多数残されている。写真1は男ミロク（北側ミロク）である。

## ② 写真2：峨洋洞菩薩立像

写真2と写真3は同じ敷地に立てられているため安城峨洋洞ミロクとも呼ばれている。昔はミロクのある周辺が田んぼであったが現在はアパートが建てられている。しかし、峨洋洞の住民はミロクに対する信仰心が残っているため、現在まで保存されてきたようだ。写真2はミロクお婆さんとも呼ばれている菩薩立像である。この菩薩立像は郷土文化遺跡第10号として指定されている。高麗時代のものと推定されたこの菩薩像には伝説が伝えられている。その伝説は次のような内容である。

「昔、若い大将がトギリという塔山へ飛び上がり、アルミという山を足で踏み、ビボン山にある大将岩に向かって走って行った。しかし、途中で誤ってミロクの頭を蹴ってミロクの頭が折れてしまった。その後、大将は戦死した。ミロクの頭は峨洋洞住民により復旧された。その後、日本時代に水害がありミロクの頭部が破損されたが村人たちは放置していた。しかし、村人の夢の中でミロクが現れ自分の首を直してくれとお願いした。住民たちはお米を集めミロクの首を復旧した」

仏像の全体的な形態は古くて素朴な感じで土俗的な傾向がある。しかし、顔の印象は女性的な柔らかさと優しさがある。目鼻立ちは綺麗に整えられている。数年前には村の人々が砂利を目の中に付け加え瞳を作った。首の部分には三道の痕跡が見える。手印は右手を胸に載せている。頭には花の模様のある花冠を被っていて仏像より峨洋洞の祖先として村を守護する神のようである。この仏像は下体埋没仏の状態であり峨洋洞住民から愛されているミロクハルマニ（弥勒婆）である。



写真2・3 峨洋洞菩薩立像と石仏立像

## ③ 写真3：峨洋洞石仏立像

峨洋洞石仏立像は峨洋洞菩薩立像の一步後に立てられているミロク仏であり、郷土文化遺跡第15号として指定されている。高麗時代のものと推定されるこの石仏を峨洋洞の住民はミロクハルバチ（ミロク爺さん）と呼ぶ。仏像の全体的な形態は古くて土俗的な傾向があるが顔の印象には男性的な威厳が見える。頭に冠を被っているがこれは仏像より宮殿の官吏の姿である。法衣は通肩として両手にかけているが手印も仏像の形式ではない手印である。この仏像も下体埋

没仏であり菩薩立像とともに峨洋洞住民から愛されているミロクハルバジである。峨洋洞の二つの仏像は仏像の条件である白毫・肉髻・三道の中のどれも備えていないので仏像より民間の守護神像としての可能性が高い。

#### ④ 写真4：カンデンイミロク

カンデンイミロクは昔、ヨンヒョン里という村に立てていたもので、最初はカンデンイという村の入口に立てられていたのでカンデンイミロクといわれている。造成年代は確かではないが高麗末から朝鮮初であるようだ。言い伝えによると西海へ向かう中国の使臣が往来する通路に立てられたという説とボオン寺を守護するジャンスンであるという説がある。カンデンイミロクの下には石積がある。現在は手入れをしてないので草が生えているが草刈りをするとう石積みの上にミロクが立てられていて威厳のある姿勢をしている。石積みは石塔と同じ概念であるので石塔の上のミロクになるのである。(話者：瑞山文化観光解説士鄭氏60代男性)。

カンデンイミロクは頭には宝冠を被り額には凸の形の白毫の痕が残っている。法衣のしわが見えるし首にも三道が見える。手印も瑞山地方の民仏と似ている。

#### ⑤ 写真5：忠清北道陰城郡三成面良德里石ミロク

石弥勒は陰城郡郷土文化遺跡第4号として指定されている。このミロクは爺さんミロクと婆さんミロクのペアであり、爺さん弥勒と婆さん弥勒は東方に約300m位離れて向き合っている(写真19)。このペアの石ミロクは陰城郡郷土文化遺跡第4号として指定されている。村祭りは行われていないが、個人的に信仰されている。

(口伝1)

良德里には昔から男ミロク(爺さんミロク)1基しかなかった。しかし、ある時期に村の婦女たちが理由のない浮気に嵌まることになった。村人たちが色々原因を調べたところ、男ミロクが一人で寂しいから女が欲しかったようだ結論をだして女ミロク(婆さんミロク)を反対側に立てて、互いに向き合わせた。すると村の婦女たちの浮気がしずまる事となった。

(口伝2)

男性ミロクの鼻を触ると縁起が良いといわれ、昔、良德里の人々は通りかかった時、ミロクの鼻を触ったという。その理由で現在、男ミロクの鼻は平らになったという。300m位離れている女ミロクは縁結びミロクである。村の若い人らが片思いをした時、女ミロクに片思いの相手の名前を呼びながら長い棒で女ミロクの下体を触ると願いが叶うといい伝えがある。実際にその行動をして結婚ができたというペアも村に現在住んでいるようである。

(話者：李デボム、男性64歳。林デキ61歳。)

西海岸から東側の内陸である忠清南道の一部を内浦ともいう。内浦は旧百済の土地である。特に徳山と瑞山は西が海、東は山で様々なミロク信仰が盛んである。

#### ⑥ 写真6：忠清南道德山郡、徳川食堂前のミロク

このミロクは高麗時代のもものと推定される。昔は田んぼの中にあったもので現在は田んぼが道路になり、道路上に立つこととなった。しかしミロクの位置は昔の通りである。このミロクの頭部は肉髻を表現していて、その上に四角形の石を宝冠として頭の上から被っている。顔は眉毛がなくてシンプルな感じである。石像の摩耗で法衣のしわなどはわからないが、仏像の核心である白毫を額の真ん中に凸の形で表現している。全体的に上体が大きく下体が地下に埋められた形態の下体埋没仏である。

このミロクは隣の徳川食堂の経営者である柳氏が管理している。彼女はここで15年間食堂を営んでいる。食堂をオープンした時はミロクが放置された状態であり、関心がなかったが、食堂がうまくいかないので親戚である僧侶に相談した結果、その僧侶からミロクの管理を誘われたという。その後毎朝、ミロクの前に清水を供えることとなり現在まで無事に食堂を営んでいるという。(話者：徳川食堂の経営者柳氏68歳女性)

#### ⑦ 写真7：忠清南道德山郡、徳山聖堂の隣のミロク

このミロクは徳川食堂の前のミロクと比べてみると比較的良い保存状態だといえる。

このミロクも肉髻を表現していて、その上に四角形の石に穴をあけ頭の上から被り宝冠を被った形態を取っている。顔はシンプルであるが眉毛を丸く表現して慈悲のある仏の顔を表している。また首には三道が確実に見え、法衣のしわも見えていて、ある程度仏像の形を取っている。ただ、なにかを表現しようとした手印が相応しくないのである。仏像の核心である白毫を額の真ん中に凸の形で表現したとみえるが石の摩耗で薄くなっている。このミロクも下体が地下に埋められた形態の下体埋没仏である。

このミロクは隣に徳山聖堂が建てられたので一時かたづけられたという。しかし、後に目の前の道路で交通事故が頻繁に起こり直ぐにミロクを現在の位置に戻したという。その後、交通事故がなくなったといわれる。現在は隣の家の方が管理している。両方とも村祭りは行っていないが、たまに個人的に祈りをする人が訪れる。しかし、両方ともミロクがいるだけで安心して生活ができるといわれている。(話者：隣でクロス屋を営んでいる金氏65歳男性)

#### ⑧ 写真8：清州順治銘石仏立像

この仏像は“清州（チョンジュ）順治名石仏立像”と呼ばれて、龍亭洞（ヨンジョンドン）ソンドルゴル村入口畑真中に立っている。四角形の石柱を削って、顔と上体を組閣（彫刻）している。額に白毫があるので仏像として見なされて石仏と指定されたと思われる。この石像はあたかも石のジャンスンのような姿をしている。胴体の下に順治9年（孝宗3年、1652）11月と書かれている。村の人々はソンドル（立石）、スグメギ（水口防ぎの意味）、トルジャンスン（石將軍）と呼ぶ。本来は現在位置より小川の上流にあったが、洪水で流れてきて埋められていたのを現在地に立てたという。

この仏像によりこの近所の村はジャンスンベギと呼ばれたという。これは仏像ながらも村の守護神的なジャンスンの機能をそろえていると見られる。

朝鮮末期には高麗の大型ミロクより小さいミロクが造成された。彫刻方法も非常に稚拙であった。また弥勒信仰は民衆により一層近づいて、呪術的な性格を持ち、民間信仰として展開されていた。石ジャンスンや立石およびすべての石をミロクとして認識し、ミロクに得男や病気の治療、福を祈る機能がより一層強く求められた。

『韓国地名総覧』にはこの場所は「ジャンスンベギ」（ジャンスンがある村）と書かれている<sup>4</sup>。1989年調査した金河斗の本にも立石ジャンスンと書かれている。しかし、額に百毫が刻まれ、仏像の真似をしたようである。この石柱は昔、洪水で流されたものを村人たちが見つけてその場所が守殺方向であるためそこに立てたと言う。よってこの石柱はスサルメギ（守殺防）とミルクの二つの役割をするのである。毎年村祭りが行われている。1月に吉日を選んで行われるが、大体1月15日の前に行う。村祭りはまず、山神堂で儀礼を行いその次に石仏に儀礼を行う。（話者：ソ氏、女性71歳）

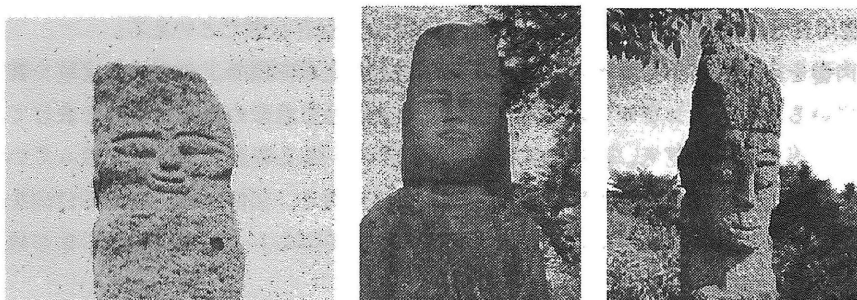


写真8・9・10の部分、両眉間に百毫が刻まれている。

#### ⑨ 写真9：瑞山余美里石仏立像

瑞山余美里（ヨミリ）には石仏が立てられている。村人はこれを余美里ミロクという。余美里ミロクは高麗時代に造成されたものとして知られている。

現在の位置から1km離れている龍獐川に埋められていたものを住民たちが発見して現在の所に移転したという。伝えられてきた話によると川辺から5 km離れている川の上流で2基の仏像がありその中の一つが流れてきたといわれている。しかし、確実ではない。高さ2.5mの仏像は首が折れたものをセメントで復元したように見える。しかし、首下には三道が見える。顔は簡潔な線で表現されている。頭には宝冠を被っている。額には白毫が凹み形になっている。法衣のしわが足まで伸びている。

村では1月に洞祭を行う。形式は村の長老が祭官になる儒教式である。しかし儀礼を僧侶に頼む事もある。余美里のミロクは1989年瑞山市有形文化財第132号として指定され、瑞山市から2,000,000万ウォン（約¥200,000）ほどの経費が出ている。その範囲内で祭りをを行うのである。

(話者：村の女性50代)

#### ⑩ 写真10：陰城馬松里石像

忠清北道陰城郡遠南面馬松里のオミ村の前に流れる川辺に石像3基が100m間隔で立っている。写真10はその中の一つである。村の人々からはミロク婆さんと呼ばれている。

両眉間の真ん中上に凸形の白毫がある。仏像の真似をしたように見えるが冠を被り文官のかたちでもある。『韓国地名総覧』3の馬松里條には、「將軍石：馬松里にある石……肅宗39年、武官高重明が地方守護の象徴として3ヶ所に立てた。」と書かれている。しかし、辛卯年は肅宗37年であるため、この石像は肅宗37年（1711年）に設置されたと思われる<sup>5</sup>。

村の長老、高氏の話では、これらの石像は昔、村の境界の表示であった。

現在、3基の石像の祭祀はオミ村を中心として行なわれている。祭は毎年1月、村の長老が生氣福德日（縁起のある良い日）を選び、儒教式で行う。しかし、村の中で葬式とか訴訟事件などの不祥事があると1か月ほど延期する。時代が変わっても祭りを中断したことはなかった。昔、高氏が子どもの時は個人儀礼もあったが、最近はしない。現在、若い人に迷信だといわれながらも儀礼を続けて行うのは村の伝統であるからである。ある大学や放送局から石像の売買の提議があったが拒絶したという。その理由は村の誇りであるからである。（高大玉、男性82才）

#### ⑪ 写真11・14・15・16：雲柱寺のミロク

雲柱寺は韓国の南、全羅南道和順郡に所在している。一般的には「千仏千塔の寺」として有名な寺である。

古来の記録を見ると『新東國輿地勝覧』卷之 四十 綾城 山川及び佛宇條に「千佛山 在縣西 二十五里」「雲柱寺 在千佛山 寺之左右山背 石仏・石塔 各一千 又有石室 二石佛相背而坐」と書かれており、綾州牧誌や綾州邑誌にも似た内容がある。これを見る限り雲柱寺はかなり古い時代から注目されていたと思われる。

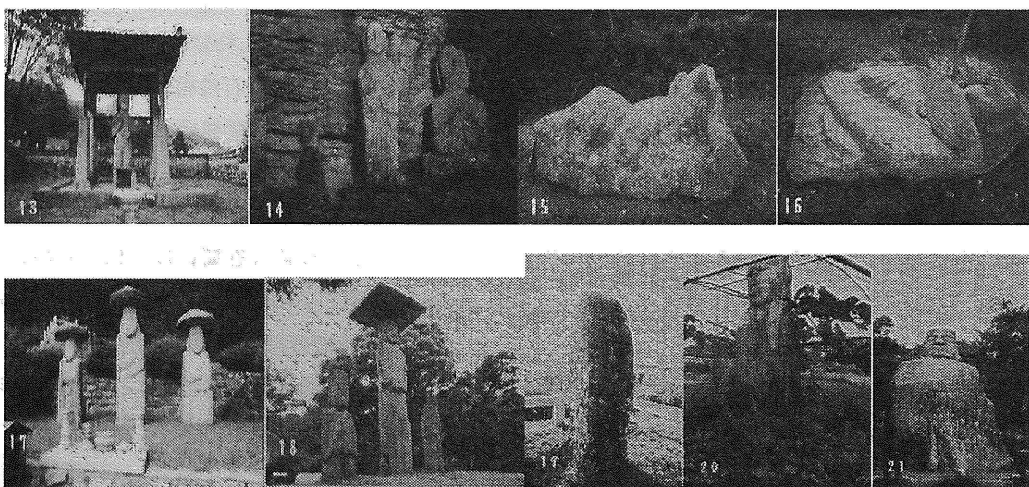
寺はムドン山の一線に位置しており、海抜100メートル余りの低い山の上にある。現在は昔の寺の姿はないが、かなり広がったようで南北に長くのびている。稜線と谷間には石仏と石塔があちこちに散在している。伝説によると僧侶の道詵國師が一晩で千仏千塔を造ったが、朝に鶏が鳴き、工事を中断したと伝えられている。まるで、石仏・石塔の野外展示場を想像させる。1941年度の調査集計によると石仏が71体、石塔が22基であったが1980年度の調査では石仏が70体、石塔が18基でいくつかが行方不明になったという。雲柱寺には一つの谷間に多数の仏像と石塔がある。その形態は一般の石仏・石塔とは違っている。造形的にはシンプルで石質は荒くて美的な美しさより土俗的な造形性で民俗学係で注目されている。しかし、美術史学系では文献資料が不備であり、造形的にも価値のないものとして軽蔑されてきた。しかし、文学者たちがその場所を舞台として作品を創造したので広く知られるようになった。たとえば、支配者に抑圧さ



れて暮らした奴婢たちが新世界出現の夢を持って千仏千塔を建てるとか、千仏千塔を造る道人を小説に登場させるなどである。伝説にすぎないが、一つの場所で千仏千塔を造る途中に朝、鶏が鳴き、工事を中断して未完成として残っている雲柱寺の石仏・石塔は永遠の神秘である。

雲柱寺の仏像は臥仏や下体が埋没状態の仏が多い。これは弥勒の時代がまだ来てない状態を表わし、いつかは寝ている弥勒が起きる事と埋められた弥勒たちが噴き出ることを願って仏像を造った人々の意志がうかがえる。

雲柱寺の仏像は素朴で派手ではない。これらは素朴な民衆自身の姿でもある。これは権威的な仏像に反発する民衆の叫びでもある。雲柱寺の仏像の制作時期は学者たちによると三国時代から統一新羅（600年代から900年代まで）という説が有力である。したがって当時の仏教は支配層の貴族仏教であり民衆は自分たちの仏教寺院を熱望したと思う。特に雲柱寺のある百済の全羅地方はおいしい米の生産地であり、外侵と支配者による収奪が多かったのである。民衆は新しい救済の世界を熱望して弥勒浄土を求め専門家ではなく自らの手で千仏千塔を建てただろう。仏像は同じ形が多いので誰かが親方になり指揮したのであろう。朝鮮時代の燕山君により寺は喪失してしまったが、現在までも何かの祈りのため、来る人の足取りは絶えない。雲柱寺の弥勒仏は下体が土に埋められた形や寝ている形の臥仏もある。特に下体埋没仏の方が多い。まだ弥勒の時代が来てないので、弥勒は土から完全には出ていない。時を待っているのである。この弥勒たちが完全に土から出た時、新天地が開かれこの世はユートピアになるのだ。民衆はそう信じている。戦争や支配者の略奪などの現実の苦しみを乗り越えるため、民衆は弥勒の前で頭をさげるのだ。寝ている弥勒が目を覚まし土から出る日を待ちながら。





⑫ 写真13：安城梅山里石仏立像

泰平弥勒とも言われる安城梅山里石仏立像はミロク堂という楼閣の中に立っているミロクである。顔にはまるい形の眉毛、額には仏像の核心である白毫があり、また首には三道がある。頭には四角形の宝冠を被っている典型的な高麗仏像である。高さ5.6mの大型であるが顔に比べて肩が狭いし顔の目鼻立ちや身体が比率に合わない。右手は全ての衆生の煩悩をなくすという施無畏印をしている。

ミロク堂の前には5層の石塔があり、ミロク堂の右側の塀の下には樹齢数百年と見られる木を切った痕跡があり、これらを推測してみると昔、城皇木とミロクと石塔があり、村の守護神の役割をしていたと思われ、またここには祭壇があったと推測される。



写真13泰平ミロク部分 写真17鼻が崩れている弓裔ミロク

⑬ 写真17：安城市国師峰の弓裔ミロク

前述した弓裔は政治的な混乱期に出現した人物である。弓裔の政治運動は失敗したが、弓裔の支持者たちは現在も残っている。この石弥勒は弓裔の支持者たちにより、弓裔の死後に造られたと伝えられる。写真17の弓裔ミロクは真中が弓裔であり、左右に臣下を率いる。左側は文臣、右側は武臣である。文臣は政治に使われるような文物を持っているし、武臣は刀を持っている。左右に臣下を率いる弓裔が弥勒でありながら王であることも表現している。弓裔ミロクは本尊仏であるため真中に立つ。また偉大な王と偉大な仏として表現するため本尊仏を大きく脇仏は本尊仏より小さく表現した。地上に出ている本尊仏は高さ310cmであり、脇仏は約245cmずつである。頭に被っているように見える円型のものはボゲ（宝蓋）というが実際には肉髻の部分に挿されている。顔は楕円形で両耳が肩まで垂れていて仏の顔を表現しようとする試みが見える。右側の脇仏は重そうな刀を両手で持っているが、本尊仏と左側の脇仏は左手を腹の上に置いて指をぱっと広げている。特に本尊仏は右手を胸に置いて何かの手印を表現しようとしているように見える。法衣は両肩を被せている通肩で両腕にはしわを図式的に表現している。本尊仏の下半身のU字型のしわは法衣を何着か着たように見える。しわの上には蓮花紋が刻まれ仏像であることを強調している。

国師庵縁起により高麗末に造成されたといわれる弓裔ミロクは、弓裔が死んだあとに弓裔の追従者たちにより造成されたと推定される。この仏像は当時盛んだった弥勒下生信仰の下体埋没仏である。弓裔ミロクの下生を待っている民衆の願いがよく見られる。

弓裔ミロクは国師庵が管理しているが特別な儀礼は行われていない。個人的に信仰されている。三尊仏全ての鼻が崩れているので祈子信仰として信仰されているミロクであることは間違いない。

#### ⑭ 写真18：忠清南道唐津郡貞美面弥勒三尊仏

忠清南道唐津郡貞美面寿堂里には安国山という山があり、その東側、山の麓に安国寺という廃寺の敷地がある。ここには高麗時代に制作された三尊仏と石塔がある。三尊仏と石塔はそれぞれ郡指定宝物100号と101号に指定されている。この三尊仏は本尊仏と左右の脇仏からなる。手印をみると造像形式に拘らない自由型である。本尊仏は土からほとんど出たようにみえるが左右の脇仏、特に本尊仏の右側の仏像は土から徐々に上がってくるような姿である。高麗の弥勒下生信仰を表す下体埋没仏である。本尊仏の左側にある仏像は破壊仏であり、体だけ残っているのに相應しい石を見つけ体の上に載せたようである。これが頭部新造仏という朝鮮時代の弥勒仏の新しい形態ともいえる。

破壊仏は朝鮮時代の排仏政策により行われた。本尊仏の頭にある帽子のような四角型の石板は宝蓋（ボゲ）と呼ばれるもので、高麗仏の特徴でもある。忠清南道はこのような民仏がよくみられるがここが旧百済の地域であるからである。

#### ⑮ 写真20：安城瑞雲面東村里葡萄畑のミロク

この石像は葡萄畑のビニルハウスに隠れている。葡萄畑の所在地は安城市瑞雲面東村里である。昔、この辺りは田んぼであったという。しかし、葡萄畑に隠れていて誰も探してくれる人もいない寂しい「ミロク」である。現在は葡萄畑だが、数年前はこの場所は田んぼだったといわれるので、写真6・7の忠清南道德山郡、徳川食堂前と徳山聖堂の隣のミロクと同じ様に高麗時代の民仏の形式ではないかと推測される。しかし、仏像の核心である白毫が見えないし首にも三道もなく法衣も見えないので朝鮮時代のものではないかとも推測される。その理由は朝鮮時代の排仏政策により仏像製作が禁止されていたのでなるべく仏像とは異なる形の仏像が製作されたとも言えるからである。

#### ⑯ 写真21：忠清南道洪城郡上下里ミロク

弓裔と共に政治的な混乱期に出現した人物の中で王建がいる。王建は最初は弓裔の部下であったが、弓裔の政治が失敗した後に王として推戴され、三国を統一して高句麗を継承する高麗を建国した。当時、王建も仏教の力を借りて政治的基盤を構築しようとした。まず、旧百済民の民心を収拾しようとした。王建は今までの王室中心と貴族中心の仏教を民衆中心の仏教と変えた。これが高麗王朝の業績でもある。寺は民衆から遠い所ではなく身近な所にあり、いつでも手を合わせ悩みごとや願いごとを告げられるようにした。そうするために彼は多くの寺院を創建し多くの仏像を造成した。弥勒下生信仰を活かすため開泰寺を始め多くの弥勒像を造成し

たのである。韓半島を弥勒浄土にするため石弥勒像を造り村々に送った。それも旧百済の土地を優先として。仏像は弥勒下生信仰を基にしたため立像にした。弥勒は現在、衆生を救うため来る途中であるからである。このような石仏は地方の石工が大量に造ったので石質が荒いし、手印も仏像の造成の形式に合わないものが大部分であった。しかも仏像の威厳を表すため大仏が多かった。もう一つの特徴は弥勒下生信仰を表すため体の一部を地下に埋め地下から地上に生えるような下体埋没仏の形をとったことである。この土地が百済の土地ではなくすでに弥勒の土地であることを民衆に知らせたのである。そして徐々に石弥勒仏が生えてきて石弥勒仏が完全に地上にくると弥勒時代になるということを知らせた。民衆は見近な所に弥勒仏がいることで嬉しかった。弥勒仏はなんでも出来る能力のある神として受け入れられたのだ。いわば、弥勒が民間の弥勒になることによって仏教は祈福信仰化し始めた。人々は得男、治病、金銭的な悩みなどを願うこととなり、これに伴って占いなどの巫俗信仰が仏教の弥勒と習合し始めた。王建が狙ったのは巫俗信仰との習合ではなかったが、石弥勒仏は巫俗信仰と習合しはじめた。これは新しい民俗信仰の形態を生み出すこととなった。写真21の忠清南道洪城郡上下里ミロク仏は忠清南道洪城郡上下里龍鳳山の麓に立てられている。高さ5mほどの巨大な岩をいかして製作したミロク仏は仏像の威厳を現わす高麗の代表的な仏像とも言える。高麗中期に制作されたと推定される龍鳳山ミロクは有形文化財87号として指定されている。

以上のような仏教の民衆化は土俗信仰との習合と弥勒下生の新しい解釈を生み出すこととなり、それは朝鮮時代になって確立されるのである。

高麗王祖の弥勒下生信仰の民衆化は高麗末まで繰り返され、その過程で様々な副作用をおこした。僧侶は国家権力を背負って寺院財産を広げていくなど様々な横暴なふるまいをした。それは朝鮮時代になってからの排仏政策を生み出す原因となった。つまり、朝鮮の排仏政策の責任は僧侶自らにあった。しかし、仏教を上流層から引き上げ下流層まで展開した高麗王朝の仏教政策は偉大な業績だともいえる。

以上は韓半島に新たに誕生した弥勒下生信仰である。筆者はこのような現状を「変容」と言いたい。しかしこのような弥勒下生信仰の変容はここで留まらなかった。引続き変容を重ね新興宗教の誕生を生み出した。以下は弥勒系列の新興宗教である。

## 5. 弥勒系列の新興宗教の誕生

### 1) 東学系とミロク

旧韓末、西学を国権を侵害する危険な思想だとみなした崔濟愚は西学に叛旗を翻して1860年東学思想を展開した。当時、崔濟愚を中心とした東学に従う一群を東学教団といった。東学は道教の風水思想と儒仏仙を基として「人乃天」（人が既に天であり）を主張してすべての人間は平等であることと「天心即人心」と述べ当時の時代状況を批判した。このような東学思想は地方官吏の横暴にたちむかう農民運動として発展した。1894年全琫準が起こした農民運動は最初の農

民運動である。東学革命、東学乱とも呼ばれ東学農民運動は日帝統治下では独立運動を起こすなど韓国社会に与えた影響は大きかった。東学教徒は未来は後天開闢するので全羅北道禅雲寺の磨崖仏のへそにその天記が隠されていたとって社会的にも物議をかもした。

後日、東学思想は孫秉熙により1909年天道教という新興宗教として発展した。天道教はソウル教区が鍾路区慶雲にあり全国に2000箇所の教区がある。済愚教、龍華教、侍天教などは天道教から分かれている新興宗教であり、龍華教、侍天教はミロクを信仰する。

## 2) 甌山系とミロク

旧韓末、全羅北道生まれの姜一淳は1901年、甌山教を設立した。甌山は彼の号である。天地公事（天地のことは人間の能力では出来ない、ただ上帝の能力により調節が可能）という教理をたてた。甌山は自ら九天上帝と名乗り、末世が来ると天地公事を通して人間を救済する。すると理想世界である地上仙界が開かれるが、それは甌山自身でしか出来ないといっている。甌山は開闢を通して後天世界を開くという天地開闢と韓国の将来を予言した。

甌山は「私が死んだら金山寺の弥勒仏を見て！」といい自称弥勒と名乗った。道士・上帝という呼び名もある甌山は「甌山道の真理」「龍華典経」「大巡典経」を執筆した。甌山がいう理想世界である地上仙界がミロクの世界である。

甌山教は新興宗教として次第に発展し、甌山教から分かれた新興宗教の教団は「甌山道」「甌山教」「大巡真理教」など何十とある。

## 3) 奉南系とミロク

奉南教は済州道北済州郡旧佐邑で生れた金永根（1898～1950）が胃病で苦しんでいたが病との戦いの過程で100日祈祷修練をした後、天上から水法を受け病を完治して霊能力を得、1934年竹島寺で教団を形成したのが始まりである。奉南教の根本は水法信仰であるため、「チャンムル教（冷水教）」とも言われる。奉南教団ではミロクを法団に安置して信仰する。ミロクが龍華世界を建設するため「水法」を持ってこの世に出現したという。

金永根の死後には自我教、天地大安教が生まれた。

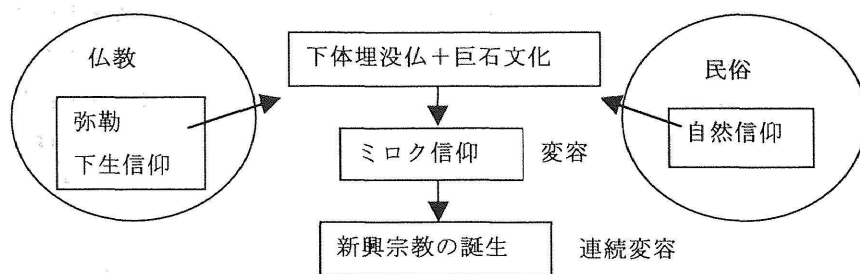
## 4) 弥勒浄土教

弥勒浄土教という新興宗教の境内に入ると異色の風景が見える。境内の小山には数多い石像が立っている。石像の中では仏・菩薩の他、キリスト、聖母、檀君、実在の人物もいる。

弥勒浄土教は弥勒以外にも全てを包容している。つまり、他の宗教の良さを自分の教理に取り上げ、包容力のある教理を編成した。過去他宗教の信仰者が来ても理解できるように説得するためである。

以上のように韓半島では寺院の弥勒が民間の「ミロク」になり、また「ミロク」信仰は新興

宗教の出現を招来した。簡単に図にすると下のようである。



(図3) 弥勒下生信仰の変容

### まとめ

韓半島において寺院の弥勒が村に降り、民間のミロクになったのは弥勒下生信仰の影響である。仏教が入る前の韓半島では体系的な宗教がなく、原始アニミズム信仰と祖先信仰が主流であった。原始自然信仰の形態で自然全てが信仰対象になり巨大な石や巨大な樹などに精霊が宿っていると信じられていた。また一緒に暮らした家族が神になり子孫を守ってくれるとも信じられていた。このように多神教的な信仰観を持っている韓半島の人々にとって外来宗教である仏教を受け入れることは簡単ではなかった。厳密にいうと異国の祖先である釈迦を祀る理由がなかったのである。しかし、賢明な政治家による仏教の再解釈は仏を神として認識させた。その対象が弥勒であり、その思想が弥勒下生信仰である。賢明な政治家による仏教の再解釈は三国時代までに遡る。

三国時代（新羅、高句麗、百済）は仏教が導入された時代である。三国は各々国家次元の巨大な寺院、派手な仏塔を造成した。当時は王室中心の仏教であるため、仏教は上流貴族層を中心として広がっており、庶民層までは広がらなかった。庶民層が信じたのは昔からの固有の民間信仰であった。しかし、高句麗を継承した高麗が三国を統一してから民心収拾政策の一策として仏教を民間層まで広げることにした。国を失った新羅と百済の民心を収拾するため仏教を利用した。弥勒仏を信奉すると韓半島は地上のユートピアである弥勒浄土になると宣伝した。国はそのため大量の仏像を村に送ることとなった。短時間に大量の仏像を造るため寺院の仏像のような精密な仏像を造るのは不可能であった。したがって石質の荒い民仏が誕生したのである。

弥勒下生信仰に基づき弥勒が来る途中であることをあらわすため立像をたてた。さらに弥勒の来る時期を知らせるため下体埋没仏の形態をとったのである。下体埋没仏は政治家の野心が籠っていた。

兜率天で修行をしている弥勒菩薩が末法時代になると弥勒如来になり、この世の人間を救うために地上に降りる。それを弥勒下生という。しかし、高麗時代の政治家は、「下生」の意味を

「下から生まれる」と解釈し、「地下から地上に湧いてくる」のを下生と認識させた。庶民たちは毎日、徐々に徐々に土から湧いて弥勒が土から完全に出てくるとこの世は弥勒浄土になり、現在のような生活の辛さから完全に解放され、地上は理想的なユートピアになると信じたのである。全ての弥勒が地下から地上に出てくる日を待ちながら庶民たちは現在の辛さを乗り越えるのである。下体埋没仏は雲柱寺など旧百済の土地の石弥勒からもみられる。ある弥勒は体の半分が埋められている。ある弥勒は体の半分以上が地上に出ている。しかし、まだ寝ている弥勒もいる。このような弥勒を庶民層は巨石信仰と結びつけ仏ではなく神として受け入れた。弥勒仏ではなくミロク様として彼らの信仰のカテゴリーに入れたのである。

これは寺の仏像が民間の仏像になる過程である。上流貴族の仏教（仏）を民間の仏教（民仏）へ、言い換えると仏教が民俗すなわち、仏が神になる過程である。これは「弥勒」が「ミロク」になっているので「変容」と言えるのだ。しかし、変容はそこで留まらず、旧韓末の民俗宗教、現在の新興宗教にもミロク思想が関わり、変容は続くのである。つまり、変容は歴史上連続性を持つ。筆者はこれを「変容の連続性」といいたい。

現在も韓国では弥勒を信仰する新興宗教が氾濫している。このような現象はミロク信仰変容の連続性であるといえる。

## 参考文献

（日本語）

- 赤沼 智善、『仏教經典史論』、(株) 三宝書院、1939.  
秋葉 隆、『朝鮮民俗誌』、朝鮮総督編、1933.  
五木 寛之・福永光司、『混沌から出発』致知出版社、1997.  
菊池 章太、『弥勒信仰のアジア』、大修館書店、2003.  
窪 徳忠、『道教の神々』、講談社、1996.  
中井 真孝、『朝鮮と日本の古代仏教』、東方出版、1994.  
野口 鉄郎・中村 璋八、『古代文化の展開と道教』、雄山閣、1997.  
野口 鉄郎・田中 文雄、『道教と神々の祭り』、大修館書店、2004.  
松田 智弘、『古代日本の道教受容と仙人』、岩田書院、1999.  
山田 利明・田中 文雄、『道教の歴史と文化』雄山閣、1998.  
山田 利明、『道法変遷』、春秋社、2002.

（韓国語）

- 窪 徳忠、최준식 譯『道教史』、분도出版社、1990.  
金 煥泰、『韓国佛教思想』、경서원、1997.  
安 原田、『甌山道の世界』、대원출판、1991.  
김 남윤외 2 인、『金山寺』、대원사、2000.  
이 태호외 2 인、『雲柱寺』、대원사、1994.

김 삼룡、『弥勒仏』、대원사、1991.

목 정배(モク・ジョンベ)、『韓国仏教学の現代的模索』東国大学出版部、2000.

金 斗河、『박스와 장승(ボクスとジャンスン)』、集文堂、1990.

<sup>1</sup> 赤沼智善『仏教経典史論』(株) 三宝書院、昭和 14 年(西歴 1939)、pp.197~203.

<sup>2</sup> 목정배(モク・ジョンベ)『韓国仏教学の現代的模索』東国大学出版部、2000、p464.

<sup>3</sup> 목정배(モク・ジョンベ)『韓国仏教学の現代的模索』東国大学出版部、2000、pp463~465.

<sup>4</sup> 金斗河著、『ボクスと「ジャンスン」』、集文堂、1990、p681

<sup>5</sup> 金斗河著、『ボクスとジャンスン』、集文堂、1990、p672.

## 学界消息

### ドイツにおける ユーミエンの文献資料調査

神奈川大学ヤオ族文化研究所は、科研課題「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の総合的研究」(研究代表者: 廣田律子、研究番号20401013)及び、トヨタ財団2009年度アジア隣人プログラム特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」計画に、研究課題「中国湖南省藍山県のユーミエンの度戒儀礼に使用される儀礼文献・儀礼文書の保存と活用と継承」という助成を受け活動を行なっている。2010年3月13日から21日にかけてドイツのミュンヘンに所在するバイエルン州立図書館(Bayerische Staatsbibliothek)(以下図書館)に収蔵されているユーミエン(過山ヤオ族)の文献資料の調査を行った。この調査はヤオ族文化研究所客員教授の丸山宏氏が『Handschriften Der Yao』(2004)を発見した事に端を発す。この700頁を越す目録には1,000点近いユーミエンの文献資料題目が列記されている。今回の調査ではこの資料の中から先々湖南省藍山県で調査を実施した、度戒儀礼に関係するものを選出し閲覧した。数多くの種類の文献資料を見る事で藍山県の度戒儀礼の理解を深める事を目的としている。

この調査は丸山宏を団長とし、吉野晃、森由利亚、浅野春二、廣田律子、泉水英計、蔡文高、蘇素卿、院生から三村が、そして中国からは湖南省文學藝術界聯合會副主席でヤオ族文化研究所客員教授の張勁松と研究員の曹秋英が参加した(以上、敬称略、順不同)。

調査は丸山宏団長がこの目録を作成したバイエルン州立図書館近遠東部門のLucia・Obi女史(以下、オビさん)と連絡を取りつつ、限られた短い期間で効率的に調査を行うべく、調査員各自による資料の選出が行われた。195点の資料がリストアップされ、事前に図

書館へ通達された。調査では、選出した195点を閲覧し、内容を確認し、重要な資料を選び出し、図書館へ複製依頼を行った。

資料の閲覧を開始したのは、雪の舞い散る3月14日の日曜日であったが、オビさんのご厚意により休館日にもかかわらず、閲覧させて頂いた。資料は一冊ずつの大きさに合わせた箱に入っており、台車に乗せられていた。そこから一冊ずつ取り出し閲覧していくのだが、その状態は虫食いや汚れ、破れが酷く、触れているだけで破損してしまいそうであった。文献資料の中には儀礼で読み上げる祭文だけではなく、呪符や人物が描かれているものや、湖南省のユーミエンの儀礼文献と比較が可能なもの、ユーミエンの出自が書き記された「評皇券牒」という大型資料、家系を記した「家先単」も見られた。資料の重要性和調査団の熱意のため、資料を開くたびに熱を持った歓声と驚きの声が上がっていた。これは目録内の限られた情報からピンポイントで貴重書を選び出した調査団の知識の深さ、洞察力の鋭さを鑑みるものであろう。また写真撮影が叶わなかったため、資料の必要な部分を筆写していたが、一つの資料を丹念に筆写していく粘り強さには眼を見張るものがある。

また、調査員たちを驚かせたのは資料だけではなく、目録を作成したオビさんの仕事についてもある。オビさんはユーミエンの儀礼を一度も見たことはない。しかし、目録に記されている資料の分類は正確であり、とても資料を読んだのみで目録を作成したとは思えない程である。このような専門家同士の熱意のぶつかり合う調査は刺激的な日々であった。

今回資料の複製依頼を行ったものは図書館から一般に公開される。こうした活動が今後世界的なヤオ族研究の礎になればと切に願う。

(ヤオ族文化研究所研究協力者・  
神奈川大学院生 三村宜敬)